

「小説『坊っちゃん』誕生秘話」を出版して

— 有恒との深い縁えにしに導かれ —

勝山 一義

はじめに

昨年(平成二十二年、二〇〇九年)九月、東京の文芸社から「小説『坊っちゃん』誕生秘話」という本を出版しました。この小説の原点となった出来事は宮城県角田の中学校に明治三十六(一九〇三)年から三十八(一九〇五)年にかけて実際にあったこと、主人公「おれ」のモデルは関根萬司と堀川三四郎の二人いたこと、「マドンナ」も「赤シャツ」も「野だいこ」野だ」も実在のモデルがいたことなどを記しました。

これらのことは、夏目漱石が舞台を四国松山に設定することによって秘し、一〇〇年間秘されたままになって来ました。私が新潟商業高校長を最後に県立高校を退職し、五年間ホコ自習館を営んだ後、関根萬司が創立した関根学園高校長として招かれたことで、秘された全貌が明らかになったのです。

この発見は有恒高校と私との関わりの中で導かれた、出合いの数々によってなされました。若しもその一つでも欠けていたらこの発見に至らなかつたことを想うと、運命の不思議に驚かすにはいられません。ここでは、その十個の若しもの話を皆さんに知っていただきたくペンをとりました。

一 若しも有恒高校に学ばなければ

昭和二十三(一九四八)年四月、私は有恒高等学校併設中学校に入学しました。その年は各市町村に新制中学校が出来て二年目で、旧制の中学校から引き続き男子中学生を募集していたのは上越地方では有恒だけでした。周辺の多くの小学校から入学しました。私のクラスは五十人(二クラスだけ)でした。ところが高校進学の際には、殆どの級友が他の県立(高田高校へは十三人)へ転じました。私は増村朴齋先生がお創りになった高校がここにあるのだからと思ひ県立高校を受験しませんでした。「若しも他の高校へ行っていたら、『坊っちゃん』誕生秘話」の解明は無かつたでしょう。

高校一年生の夏休みにクラス担任の池田立司先生(高士村十二の木の方)が小説『坊っちゃん』を読むよう課題を出されました。活劇のように面白く、越後の笹飴が出て来たので、高田の話かと思つて胸をわくわくさせました。途中から四国松山に舞台が移つたのがっかりしたことを覚えております。若しも池田先生が宿題を出されなかつたら、今回の発見にはつながらなかつたでしょう。

高校二年の夏休みまでバスケットボールをしていました。九月に入つてクラス担任の相浦袈裟男先生が、「お前は何も勉強していないな。こんな様では入れる大学は一つも無いぞ」と、教務室のガラスが割れるような大声で叱ってくださいました。その日から毎日自宅で六時間勉強しました。しかし一年半の独学では間に合わず、東京教育大学を失敗し、早稲田と上智に合格しました。どちらにしようかと迷いましたが、有恒高校の名誉校長清水泰次先生が早稲田大学教授でしたので早稲田に入学金を納めました。若しも相浦先生と清水先生がおられなかつたら早稲田大学との縁が生じず、今回の発見は無かつたでしょう。

二 若しも早稲田でレポートを書かなければ

大学二年の冬休みに、教育学部の川副国基(かわぞえくにもと)教授の「現代文学」のレポートで『坊っちゃん』を書きました。高校一年の時に読んでいたし笹飴が出てくるので、『坊っちゃん』なら書けると思ったのであります。

帰省を遅らせて大学の図書館で読んだ一冊の解説書に『坊っちゃん』の主人公のモデルは宮城県角田の宮城県第四中学校に勤務した東京物理学校卒業の数学教師関根萬司で、それを漱石に紹介したのは東大の漱石の教え子堀川三四郎である」と書いてありました。その時は、『坊っちゃん』は四国松山の話なのに反対方向の寒いところだな、関根萬司は四角っぽい漢字だなど思い、好い感じを持ちませんでした。それだけに強く印象に残っておりまして。⁴若しもこのレポートの宿題がなければ、今回の発見はなかったと思います。この解説書は重要な文献ですが、まだその本が見つかっていません。

それから四十六年して、平成十三(二〇〇二)年四月に関根学園高校長として赴任した時に、先ず一番最初に、小森昭彦理事長に「創立者」と「建学の精神」について聞きました。⁵若しも有恒に学んでいなければ、私立学校にとつてこの二つが教育上重要な意味を持つことを深く理解しておらず、関根萬司先生を大切にすることもなかったでしょう。この時は創立者の名前を聞いても大学二年生の時に読んだ氏名とはすぐに一致ませんでした。どうして宮城県角田と新潟県高田がつながるのでしょうか。

三 若しも高田高校保存の履歴書が発見されなければ

平成十五(二〇〇三)年七月の高田地区高等学校長会議の時でした。隣席の上越高等学校(旧・高田女子校、元・家政女学校)の南保悟校長(有恒卒、東京理科大卒、現・有恒同窓会長)に、「関根学園創立者関根萬司先生は先生と同じ東京物理学校卒業で高田中学校の数学の先生をしておられたんですよ」と話しました。⁶若しも南保先生が有恒の同窓生でなかったら、こんなことは決して言わなかったと思います。その時私の席に居られたのが高田高等学校の竹澤攻一校長でした。九月の校長会の時に竹澤先生は「関根萬司先生の履歴書がありましたよ」と言われました。先生は「高田高等学校沿革史余話」を執筆するために、夏休み中に古い履歴書綴を見ておられ、たまたま七月に耳にしていた関根萬司のものに目が止ったのです。⁷若しも竹澤先生がその夏に執筆準備をしておられなければ、関根先生の履歴書は埋れたままになっていたでしょう。早速コピーを送っていただきました。関根先生は高田中学校の前は宮城県第四中学校(現・角田高校)におられました。竹澤先生は平成七(一九九五)年秋に挙行された有恒高校百周年記念式典に北城高校の校長代理(当時教頭)として参列され、私の「卒業生代表喜びの言葉」(「有恒一〇〇年の歩み」所収)を聞いて私に親しみを持っていてくださったと言われました。⁸若しも竹澤先生が有恒の式典に参加されず、私に厚意を持っていてくださらなかつたら、関根先生の履歴書を見すごしてしまわれたかも知れません。私に喜びの言葉を述べさせて下さった百周年記念事業実行委員の皆様にご感謝申し上げます。

履歴書を見てもすぐには大学二年生の時の記憶には結びつきませんでした。それから半年間、私

の頭の中のコンピュータは勝手に作動していたのでしよう。平成十六(二〇〇四)年四月二日、校長室の関根先生の写真を見ていて「この人が『坊っちゃん』のモデルだ」と閃(ひらめ)いたのです。

四 若しも新潟商業高校の校長をしなければ

夏目漱石全集(岩波一九九六年版)の書簡集(明治三十六(一九〇三)年〜四十(一九〇七)年)を調べました。『坊っちゃん』が発表されたのは明治三十九(一九〇六)年、ホトトギスの四月号ですから、その前後に何か手掛りが無いかと考えたのです。ありました。明治三十八年三月四日と四月十日付けの二通です。角田の中学校にいる教え子の堀川三四郎が辞任したいと言っているので採用してほしいという内容でした。角田高校の高橋仁校長に電話して、堀川先生の履歴書のコピーを送っていただきました。それを見て又びつくりしました。堀川三四郎は明治二十九年に新潟商業学校を卒業していました。それは私の県立最後の勤務校だったのです。

堀川先生は新潟市沼垂の生れでした。親戚の方がわかりました。生家の所在地もわかりました。この調査に当たっては、沼垂在住の新潟商業高校卒業生の佐藤勲氏らが我が事のように連絡し合ってくださいっています。私が元校長だというので親しみを込めて励ましてくださいいます。

。若しも私が元新潟商業高校長でなければ、こんなに、スムーズに調査が進まなかったでしょう。昭和四十五(一九七〇)年四月に私は有恒を後に糸魚川商工高校へ転出しました。その後の異動連鎖は運命の赤い糸で私を新潟商業高校へ導いたのです。

五 若しも板倉町敬老会で講演しなかったら

平成二十(二〇〇八)年三月二日、板倉町民会館で『坊っちゃん』のモデルについて話させていただきました。準備のために小説『坊っちゃん』を読みました。十回を越えたでしょう。それなのに改めて重大な新発見があったのです。

小説では、松山に着いた「おれ」は、バツタ事件などで生徒とやり合った後、教頭「赤シャツ」。画学の「野だいこ」野だ」に誘われて海釣りに出掛けます。舟の上で「赤シャツ」は「おれ」に忠告します。「悪玉に乗ぜられると前任者のようになりますよ」と言ったのです。この時はじめて「前任者」という言葉にひっかかりました。そしてすぐ気がつきました。前任者とは角田から高田中学校へ転出した関根萬司だ(だから婆や「清」は土産に越後の笹飴を所望したのだ)。そして松山へ着いた「おれ」は、角田へ着任した堀川三四郎だ。松山を角田に読み変えれば、すべてはすらすらと解ける。英語の堀川先生を関根萬司の後任だから数学の教師にしたのだ。つまり主人公「おれ」は、松山へ到着した段階でモデルチェンジしてあるのだ。そのように考えると、「清」も「赤シャツ」も「野だいこ」野だ」も「うらなり」も「マドンナ」も「狸」も、角田の町の実在の人物に無理なく当てはまります。漱石は角田の中学校の話であることを秘すために、舞台を十年前に勤めて土地勘のある松山に設定して小説化したことがわかったのです。

¹⁰若しも板倉の敬老会に講師として呼ばれなければ、未だ「前任者」というキーワードに気づいていないかも知れません。私を呼んでくださった敬老会の役員(有恒の先輩)の皆様深く感謝するものです。

おわりに

主人公のモデル二人説等は大学二年生の時に読んだ解説書にも書いてありませんでした。日本ではじめてこの秘話に気付くことが出来たのは全くもって、私の有恒高校との縁(えにし)によるものであります。深い謝意を捧げます。

本稿は、有恒高等学校昭和四十六年卒の有志を中心に発行している文集「雪駄」の第六号(二〇一〇年四月)にご寄稿いただいたものです。

校歌の意味

勝山 一義

有恒高等学校の校歌は川合直次の作詞です。川合は朴齋先生の親戚で漢詩人、後に長く高田市長を勤め、貴族院議員にもなりました。作曲の小林礼は高田師範学校の音楽教師でした。

校歌の内容は有恒の教育精神を実によく表現していて、生徒及び卒業生の人生の指針になるものです。曲も大変素晴らしいもので、コーラスをしている私も感心しています。

そこで、この場をお借りして校歌の意味を後の世代に伝えさせていたいただきたいと思えます。

- 一 山三面に重なりて 沖の宮里境幽に
- 海一角に打ち開け 頸城平の風清し

○沖の宮里・・・沖の宮のあるこの場所。沖の宮は校門を入った左側の杉林の中にあつた祠(ほこら)です。幽玄な雰囲気が漂っていたそうです。私が入学した昭和二十三(一九四八)年の前々年に新制中学校(有恒高校に併設)に入学希望者が多いので、杉林を校舎新築の用材として伐採したのです。沖の宮は塚の宮の境内に移されました。私が入学した時には切り株が沢山ありました。

一番は、有恒高校の立地の素晴しさを謳い上げております。

二 清白義侠の名のほまれ 霜台公の跡ふれど
遺風を今に仰ぎつつ いそしむ健児五百人

○清白・・・清廉(せいれん)(心が清らかで私欲がないこと)潔白(けっぱく)(心や行いが正しく後暗いところがない)
○義侠(義で行動しおとこぎがあること)・・・謙信公の生き方に学ぼうとするものである。謙信公の理想は第一義
つまり義(正しいこと)を第一にすることである。
○有恒の三綱領のトップは「君子は義に喻り小人は利に喻る」です(論語「里仁編」)。行動に当って「正しいこと
はどれか」を考えて自分の立場を決めるのが君子で、「得なのはどれか」を考えて行動するのが小人だという意味で
す。

二番は、謙信の遺風に学んで生きようといっています。霜台公は謙信公のことで、朴齋先生が謙信公を霜台公と
なおされたのだと、昭和十八年卒の八木宣正先輩から伺いました。

三 五条の学規厳として 我を見守る朝夕や
入りては切磋の功を積み 出でては虚栄の影追わず

○入りては・・・個人としては、自分自身は
○出でては・・・他人との関係では
○切磋・・・知恵・学問をみがき励む
○虚栄・・・みえ

三番は、五条の学規を身に体して、自ら切磋琢磨し、みえを張らず誠実に生きようと言っています。

四 誇りとするも唯一つ かたき操守は紅の
猛火にとけぬ鉄石か 霜露にあせぬ松柏か

○操守・・・裏切らないこと。

四番は、学規の中でも特に操守堅固、つまり絶対に人を裏切らない人物であることを誇りとしているとうたつて
いる。

五 質朴剛毅の学風を 提げて立つ天が下
もろ声高く呼ばわらば などか響のあらざらん

○質朴・・・本質は身を飾らない。
○剛毅・・・意志が強く容易に屈しない。
○学風・・・校風、その学校に学ぶと自然にそのような人間になる。
○提げて立つ天が下・・・在学生も卒業生も、質朴剛毅の人格で生きて行こう
○もろ声高く呼ばわらば・・・社会の中で生きていけば(声に出して言わないでよい)
○などか響のあらざらん・・・どうして有恒の教育の秀れていることが世に知られないことがあるのか。

※ 実に素晴らしい校歌ではありませんか。

本稿は、有恒高等学校昭和四十六年卒の有志を中心に発行している文集「雪駄」の第七号（二〇一二年五月）にご寄稿いただいたものです。

勝山一義（かつやまかずよし）先生のご紹介

上越市清里区上深沢出身。昭和二九年、本校卒。同三三年、早稲田大学第一文学部史学科東洋史専修を卒業後帰郷し、社会科の教員として本校に赴任後、糸魚川高校、新潟商業高校の校長を歴任。その間、県教育庁高等学校教育課管理主事、新潟市教育委員会教育次長を務めた。平成八年、定年退職後「ホコ自習館」を開設するも、同一三年、請われて関根学園校長となり、率先垂範して建学の精神を確認・実践する一方、同学園創設者関根萬司 〓 「坊っちゃん」のモデル説を発表。漱石ファンに新風を吹き込む。現在も「坊っちゃん」研究の傍ら、「ホコ自習館」で教育活動を行っている。（平成二〇年五月の紹介文より）